

R8現場の声をカタチに！知事のゲンバ・キャラバン（大仙・仙北地域開催）

開催概要

1 開催概要

- 日 時 令和8年8月2日（日）10:00～11:20
- 訪問先 NPO法人ウォランタス（美郷町）
食育や地元企業と連携した体験イベント等を通じてコミュニティづくりに取り組む、「イベント型こども食堂」を運営している団体
- 会 場 美郷町本館コミュニティセンター（美郷町）
- 参加者

NO.	名前	備考
1	阿部 大地 さん	NPO法人ウォランタス 理事長
2	齋藤 和子 さん	NPO法人ウォランタス 理事
3	最上 智大 さん	こども食堂 ボランティア
4	齋藤 彩貴 さん	こども食堂 参加者
5	金子 美桜 さん	こども食堂 高校生ボランティア
6	草薙 春陽 さん	こども食堂 高校生ボランティア

- 実施内容
 - （1）開会挨拶（知事）
 - （2）団体の取組発表（NPO法人ウォランタス 理事長）
 - （3）意見交換
 - （4）現場視察「こども食堂の視察」

2 開会挨拶（知事）

本日はお招きいただき感謝する。このゲンバ・キャラバンは、会議室でお話を聞くだけではなく、実際にどのような活動が行われているのかをこの目で確かめるため、現場に赴いて直接お話を伺う取り組みとして、今年度から開始したものである。

こども食堂は重要な事業であるが、運営上の課題の一つとして、利用を希望しながらも「行こうかな」と思っても行けないという心理的ハードルが生じやすい。

ウォランタスはその壁を見事にクリアしている団体として注目していたため、本日ここに来て本当によかったと思っている。

本日は活動における課題や要望等の率直な意見を聞かせてほしい。

3 団体の取組発表

NPO法人ウォランタスの阿部理事長より、こども食堂の取組について発表。

（1） 設立目的と目指す姿

地域におけるこどもを中心としたコミュニティの減少に対し、住民やこども、その家族が分け隔てなく関われる居場所づくりを目指して設立。単なる食事提供（個別支援）にとどまらず、「食育・共食」「地産地消」「多世代交流」を掲げた地域づくりを目指す。

(2) 取組内容

県南地域6箇所でこども食堂を開催。食育体験や地元企業のお仕事体験といったアクティビティを通じて、こどもたちが地元に愛着を持ち、将来的に地元に定着するきっかけを作っている。

(3) 活動を通じた参加者等の変化

食育体験により、こどもたちが嫌いな野菜を克服したり、アクティビティを通じて、障害の有無に関わらないこども同士の交流が生まれたりしている。また、SNSでの発信やメディアによる周知が、さらなる支援の輪の拡大に繋がっている。

(4) 運営上の課題

・資金面（調味料や主菜の高騰）

米や野菜の寄付はあるものの、主菜（肉・魚）や高騰する調味料の購入費用が大きな負担となっている。

・人材面（ボランティア不足）

普段は5、6人での運営だが、クリスマス会等の大型イベント時には最大120人のような規模になり、若く体力のあるボランティア人材の確保が常に不足している。

・場所の確保

厨房設備が整った無料施設が少ないことや、地域によっては「地元に事務局がない団体には無料では貸し出せない」といった制度上の障壁があり、会場確保に苦戦している。

4 意見交換

○知事

本当によく考え抜かれて、かつ熱意と寛容な心を持ってここまで活動を成長させてこられたのだと感じ、心から敬意を表する。

だからこそ、以前は利用者だった方が今度はボランティアとして手伝いたいと思ってくれるようになる。これこそが、阿部理事長たちの思いの強さの表れである。

参加者の方々からも、これまでの活動に関わってきた中での感想や思い、楽しい点、あるいは今後に期待することなどについて率直な意見を聞かせてほしい。

○齋藤 彩貴 さん（こども食堂参加者）

初めてこども食堂に参加したのは、お仕事体験に参加した時である。

普段はなかなか経験させてあげられない体験ができるので非常に楽しかったし、その際に、地域の色々な方と触れ合えたことが非常に嬉しかった。普段生活しているコミュニティだけでなく、様々な人と触れ合えることが自身にとっても刺激になり、それから夏休みなどの活動にも参加するようになった。

○最上 智大 さん（こども食堂 ボランティア）

食堂に参加すると食事はもちろん、同世代から異なる世代まで様々な人と交流ができるところが大きなメリットである。参加しているお父さんお母さんたちから「普段こういう経験ができないから、ぜひ継続してほしい」という声を聞き、自身も支える側としてお手伝いしたいと思い始めたのがきっかけである。私自身も貴重な体験をさせてもらっているし、美郷町のコミュニティをもっと良くしていきたいと考えている。

○知事

アクティビティを通じて、学校や職場以外の人と出会うことには大きな価値がある。

そこから一歩踏み込んで、今度は運営を手伝おうと思ってくださる方がだんだん増えていくことこそが、活動の継続につながっていく。

今日は高校生が2人手伝いに来てくれているが、ここに来たきっかけや「ほとり食堂」に対する思いについて、自由にお話ししてほしい。

○金子 美桜 さん（こども食堂 高校生ボランティア）

「誰かの役に立ちたい」「どのような形でいいから人を支えたい」という思いがあり、最初に学校の先生がSNSでウォランタスの活動を見つけてくれて、このような活動があると紹介してくれた。人を支えたいという自身の思いにこの活動がとてもマッチしている。

ここは普段の高校生活ではできない調理の経験や、地域の方々とお話ししたり、こどもたちと交流したりできるので、学校生活だけでは得られない貴重な経験ができています。

○知事

学校がきちんと情報をキャッチしてくれたのが大きい。高校生のような世代に手伝ってもらえると、こどもと大人の間をつなぐ存在として、非常に大きな価値がある。高校生たちの背中を見て、次のこどもたちが育っていくのだろう。

食材の確保についてお話があったが、どうしても「こども食堂は民間の善意で成り立つもの」と考えがちである。しかし、冬場に食材が不足するというのは非常に現実的な問題である。夏や秋などの恵まれた時期に比べて、冬場にはこういった食材が足りなくなるか。

○齋藤 和子 さん（NPO法人ウォランタス 理事）

夏から秋までは地域で野菜が採れるので十分間に合うが、冬の時期になると、寄付していただくお野菜が根菜やじゃがいもくらいしかなくなってしまいう状況である。

○阿部 大地 さん（NPO法人ウォランタス 理事長）

お米は、昨年価格が上がったタイミングで、寄付していただける量がかなり減ってしまった。今年はまた集まるようになると良いのだが、こうした状況でも、地元の方などが未検査米の同等のものを提供してくださるなど、そうした支援をいただきながらなんとかつないでいる状況である。

また、調味料はすべて値上がりしている。普段は50～60人、多いときだと100人近い規模の食事を作るため、調味料の仕込み量もかなりのものになり、毎回、調味料代だけでも相当な金額になる。

大人の方からは協力金として任意の募金をいただいているが、それだけで食材や高騰する調味料のすべてを賄うのはやはり難しい。

○知事

全国的にこども食堂の活動は広がっているが、秋田県内は57箇所となっている。これは全国的に比べると非常に少ない現状である。

そのため、県として新規の立ち上げ支援は行っているが、立ち上げだけでなく、その後のランニングコストをどう支えていくかという課題がある。

これまでは「民間の善意でやっていくべきもの」という前提で語られてきたが、こども食堂は非常に大事な活動であり、かなり公的な機能を果たしていると思っている。

ただし、公金を投じるときには、ちゃんとした納得感が得られる必要がある。他県の事例なども調べながら、支援を考えていきたい。

○阿部 大地 さん（NPO法人ウォランタス 理事長）

補助金をいただける制度はあるが、よくあるのが「20万円や30万円を支援します。ただし、自己負担が3分の1あります」というような仕組みである。そうすると、活動資金に余裕がないため、自己負担分がどうしても捻出できず、申請を断念して見送った事例がこれまでに何度もある。

さらに、全額を一度自分たちで立て替え払いしなければいけないという仕組みが、資金力のないこども食堂にとって非常に大きな壁になっている。一方で、良くない方向に使う方がいるのも事実なので、不適切な使われ方を防ぐための審査や条件が必要なことも十分に理解している。

その上で、一番ありがたいのはもちろん直接的な資金の支援だが、その次に求めているのは、こども食堂への理解や社会的な認知を広める取り組みである。社会全体の理解が深まるよ

うに支援をしていただくことで、民間からの支援やボランティアの輪も自然と広がっていくと考えている。

○知事

今日、こうして高校生たちが一生懸命手伝ってくれている姿や、活動の意義や尊さを広く周知することは、行政もしっかりと手伝っていけるし、手伝っていくべきものと考えている。認知を広げることと実際の運営をサポートすること、その両面から私たちにできることを検討していきたい。

今日手伝ってくれている高校生のお二人は、こどもたちと接していて何か変化やリアクションなど、感じることはあるか。

○金子 美桜 さん（こども食堂 高校生ボランティア）（高校生ボランティア）

私は、最初はこどもが少し苦手だなという意識があった。でも、「誰かの役に立ちたい」という思いでこのボランティアに参加して、実際にこどもたちと関わっているうちに、「自分はこどもが苦手ではないんだな。むしろ好きだな。」と思えるようになった。

普段の高校生活の中では、小さなこどもと関わる機会はほとんどないので、ここに来て活動すること自体が自身のリフレッシュにもなっている。

○草薙 春陽 さん（こども食堂 ボランティア）

こどもたちが障害の有無に関係なく、誰に対しても分け隔てなく接してくれるのをすごく感じている。ここに参加することで、結果的に自身がこどもたちから元気やパワーをもらっているように思う。学校生活以外で、色々な世代の人と会える機会が得られること自体が、自身にとってとても大きな経験である。

○知事

苦手意識があったのに、まずは参加してみようと一歩を踏み出したのもすごいし、活動を通じて「自分は苦手じゃない、むしろ好きだ」と自身が成長していると実感できているのは本当に素晴らしい。

また、学校の中だけだと、同級生や先生としか接点がない。多様な人たちと触れ合って活動することは、これからの人生においてとても大きな財産になる。今しかできない素晴らしい経験を、ぜひ大切にしてほしい。

○齋藤 彩貴 さん（こども食堂参加者）

普段の生活コミュニティ以外のところで、こうした温かいつながりができるのは本当にありがたい。こういった活動がもっと広まって、地域全体で子育てしやすい環境になってほしい。今日は保育園のママ友も一緒に誘って参加しているが、自身も、こういう素敵な活動をさらに広げていくためのお手伝いができればいいなと思っている。

○最上 智大 さん（こども食堂 ボランティア）

自身が生まれ育った美郷町で、このような活動を続けていただけることは、子育て世代の大きな安心感につながっている。

ここで活動を通じて生まれた温かいつながりがあるからこそ、今住んでいる人たちが「ずっとこの美郷町に住み続けたい」と思える。また、こういう魅力的な活動があれば、町外から移住してくれる若い世代も増えていくと思う。

最終的には、そうやって若い世代が増え、美郷町全体が盛り上がっていくきっかけになれば嬉しいと考えている。

○知事

美郷町は、本当に水もきれいで暮らしやすい素晴らしい町である。その魅力に加えて、この温かいコミュニティという価値が合わさることは、とても大きい。

実際、活動を立ち上げた阿部 大地 さん（NPO法人ウォランタス 理事長）が移住してこれたというのも、その価値を証明している。私も県外から秋田に来た人間ですので、この草の根の活動の価値というものを、今日こうして皆様とお話しして改めて強く実感した。

皆様からいただいた生の課題や想いを受け止め、支援に関しては、これから県としてしっかりと前向きに検討させていただきたい。本当にありがとうございました。

5 会場の様子



